

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow

幼心にときめいた、あのガラスのきらめき。
その美しさを実現するためなら、
どんなに高い壁も乗り越えていきます。

薩摩切子職人

永井里沙氏



Risa Nagai

1987年香川県生まれ。「薩摩切子」を作る職人になりたいとの夢を抱き、高校卒業後に鹿児島市の「薩摩ガラス工芸」に入社。よみがえった技を継承するべく修業に励んでいる。

雄大な桜島を目前に望み、西郷隆盛をはじめ幾多の維新の志士を輩出した九州・鹿児島。かつて、薩摩藩と呼ばれたこの地を代表する伝統工芸品が、薩摩切子と称されるガラス製品。紅や藍、紫などの色ガラスに幾何学的なカット文様を彫り込んだ薩摩切子は、江戸末期に当時の薩摩藩主、島津斉彬の命により生み出されたものだ。永井里沙さんは鹿児島市内のガラス工芸会社に勤めながら、優れた薩摩切子職人を目指して、日々努力を重ねている。高校卒業とともにこの道に入った彼女が、最初に薩摩切子に出会ったのは小学生のとき。そしてすぐに、その美しさに魅了されたという。

一 薩摩切子の魅力はどのようなところ？

永井「初めて見たとき、それが薩摩切子だとは知りませんでした。紅色のガラスでしたが、キラキラと輝く赤い色の中にどこか温かみを感じられて、とにかく『キレイ』と思ったんです。それがきっかけとなって、今に至っています」
薩摩切子の製造工程は大きく二つに分けられる。一つ目は、外側が色付きで内側が透明という、二層の色被せガラスをつくる「成形」。もう一つは色被せガラスの表面にカット文様を彫り込み、製品へと仕上げる「加工」。各工程はさらにいくつかの作業に分けられ、それぞれ専門の職人が存在するが、入社四年目の永井さんは、その最後の作業である「磨き」を任されている。成形からカットまで、多くの先輩職人の手によって作られてきた作品が、一瞬の気の緩みで台無しになることのないよう、全ての神経を指先に集中させて作業を行う。



そんな永井さんが目指しているのはカット師。名前が示す通り、ダイヤモンドホイールなどを用いてガラスにカット文様を施す職人だ。

カットは熟練した職人でないといけない作業といわれ、一本の筋を彫り込むことすら難しい。一本一本を正確にカットできない限り、薩摩切子独特のキラキラと輝く文様を生み出すことはできず、また「温かみ」を演出する色彩のグラデーションは、彫り込みの角度を微妙に調節することでしか表現できない。

永井さんはカットの第一人者である上司、中根総子氏の下で経験を積みながら、技を磨いているところだ。

二 自分にとって上司はどのような存在？

永井「中根さんはカットだけでなく、文様のデザインまで自分でされるんです。自分で発想して、それを形にできる中根さんは私にとって憧れの存在です。本当に尊敬しています」

幕末に誕生した薩摩切子だが、発案者の島津斉彬の急逝や1863年に勃発した薩英戦争の影響で、一度その命脈が途絶えてしまう。それから一世紀以上の間、薩摩切子の製造方

懐かしくも美しい
日本の俳句

Heartful Haiku Poems

Vol.57



栗栖野や月を咎むる犬の声
琴峰

イラスト ひらいみも

栗栖野という名の語源はわからない。だが「子にまさる宝物はない」という気持ちをも、「瓜食めば子ども思ほゆ、栗食めばまして惚はゆ」(山上憶良・万葉巻五)と詠んだ昔を思い合わせると、栗が豊かに実る地域という意が穏当だろう。初めはクリスノであった発音が崩れてクルスノになった。とすれば、栗栖野とか栗野と書く土地が全国にあって不思議はない。

掲出句の場合は京都であろうか。作者琴峰は十八世紀の俳人で薩摩国(鹿児島県西部)鹿兒島の人である。城下の商人として上方にも通い、芭蕉門人の野坡に俳諧を学んでいるから、古来公家が狩りをする場として知られ、吉田兼好が「神無月のころ、栗栖野といふと

ころを過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りに(徒然草・十一段)と書く文学史上の地名がよく似合う。冬季の狩猟をひかえた猫犬が、りりしく晩秋の月に吠える姿を思い描きたい。

なお蛇足ながら、研究史上に示される京都の栗栖野の地には北区の鷹峯(洛北郊外)・上京区北野や紫野周辺・東山区稲荷山の東麓・伏見区の醍醐という四説があつて、研究者を悩ませてきたことを付記しよう。

作品は薩摩藩名士略伝「称名墓誌」による。その際野中常雄著「鹿兒島俳諧史」(鹿兒島大学教育学部教育研究所研究紀要)昭二九・十二を参照した。

東洋大学教授 谷地快一

日本の伝統・文化を継承する若者たち
「明日への扉」

わが国が世界に誇る、固有の伝統・文化の数々……。先人たちが築いてきた、その知恵や技を受け継ぐ若者たちがいる。夢を追いかけ日々研鑽する彼らの「ひた向きで真摯な姿」と普段の暮らしから垣間見える「素顔」をご紹介します。

MOVIE 動画コンテンツ「明日への扉」では、日本の伝統・文化を受け継ぐ若者たちの姿を、臨場感ある映像でご紹介。30人以上のバックナンバーがご覧になれます。

Web版 パソコンやタブレット型端末など各種デバイスでご覧になれます。
<http://www.athome.co.jp/tobira/>

TV ディスカバリーチャンネル(CS) Discovery CHANNEL
冠番組 「アットホーム presents 明日への扉」 放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中



法は謎とされ「幻の切子」といわれ続けたが、1985年に再興が図られ、研究者や職人の努力によって本格的に製作されるようになった。中根さんは再興に尽力した主要メンバーの一人であり、職人として、自らの使命を次のように考えている。「再興は、いくつもの作品を復元すれば、それで終わりというものではありません。薩摩切子は、次世代に受け継がれる伝統工芸でなければならぬと思っています。だから、まだ休むわけにはいきません。私の持つ技や感覚の全てを次の世代に



引き継いだ時が、自分の役目が終わる時であり、一段落できる時だと考えています。

上司のそんな思いを、永井さんほどのように受け止めているのだろうか。

二 技を磨くために、心掛けていることは？

永井「一人前のカット師への道のりはまだ遠いと思いますが、少しずつ、感覚をつかめるようになってきました。これ

からも、どんな難しい作業に挑戦したいと思っています。そうしなければ、技を磨くことなどできませんからね。難しいから無理だと自分で限界点をつくってしまうと、それ以上には進めません。たとえそれがどんなに高くても、目の前の壁を乗り越えようと努力することで、職人としての腕が磨かれていくのだと信じています」

一度消えた火が、職人の熱い思いで再びもつた。そして、その明かりに引かれた若者が、これからもその明かりを照らし続ける。憧れの人に認められ、優れた薩摩切子職人になるために、彼女の努力の日々は続く。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

取材を終えて

上司の中根さんや先輩方の指導を受けながら日々研鑽を積んでいる永井さん。破損の恐れがあるガラスと向き合い、薩摩切子の仕上がりを左右する重要な磨きの作業に全神経を集中させ挑んでいる姿と鋭い眼差しがとても印象的でした。



薩摩切子

江戸末期に薩摩藩で考案された、カット文様を彫り込んだガラス製品。同藩では色ガラス製法の研究が積極的に進められ、当時の日本では作り得なかった紅色や紫、黄色などの発色に成功。その後、美術工芸品として高く評価され、本格的な製造事業が始まるものの、本文にあるように事業は中断。当時の作品は現存するものが極端に少なく、現在ではかなりの高値で取引されている。